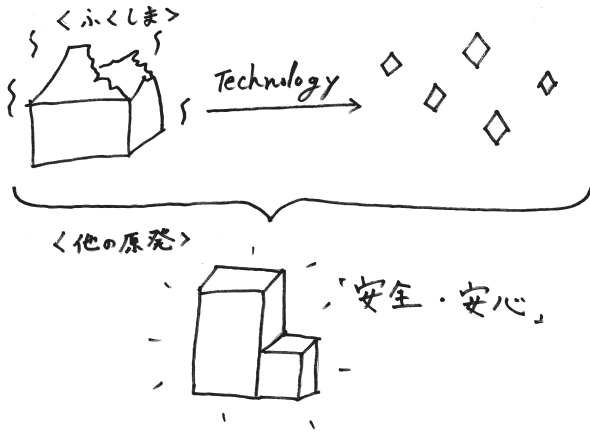




令和元年 5 月 11 日 (土)

おもて

「今後の原発の運用はどうなる？」



効率的な発電である原子力発電だが、福島第一原発の事故のため「原発は危険なもの」という認識が広がり、そこで福島原発事故により発展した炉内技術を利用することで、原発の安全な運用が出来るのではと考えた。

うら

もし事故が起きてしまったとき
ふくしまの教訓をどう生かすか。

福島第一原子力発電所の事故

廃炉作業に時間がかかっている
→ 技術面、コスト面

だけど、廃炉技術は発展している
(ex)、ロボット、汚染水対策、除染

これを生かし、安全な原発運用につなげる!!

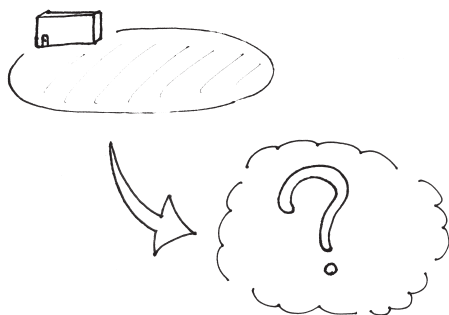
ふくしまの教訓

事故が起きてしまったときに、安全を確保し
被害を減少させることにつなげる。

⇒ 廃炉を進める

おもて

廃炉が終わった後、
その土地はどうするのか



- ・現状のことが目に見えるが
→ 未来のことはきちんと考えているのか
- ・原子力発電はとても効率の良い発電
→ 廃炉後、その分のエネルギーをどうするのか
- ・廃炉後、その土地を利用するターゲットは誰か

うら

廃炉した後、更地となって残るであろう
その土地を、何を目的として利用するのか？
そもそも、どこまでの作業が廃炉なのか？

その土地を利用するかもしれないターゲットによって
廃炉の行く先は変わってくる。

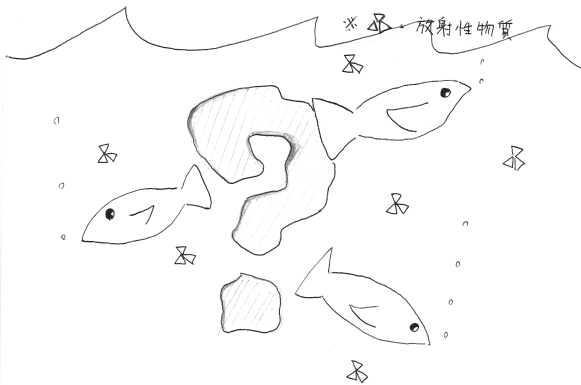
- ① 人が定住するような土地にする。
 - ・徹底的な除染が必要。
- ② 後世への遺産として残す。
 - ・原発事故の記憶を消さないように、建物は残す。
- ③ エネルギー開発に利用する。
 - ・研究所を作るもよし、その土地で発電するもよし。
 - 建物を取り壊し、ある程度まで除染しなければならぬ。

②は実際にチェルノブイリ原発でも採用されているが、
これらは私たちの理想であるため、明確な答えは存在しない。

地元の人たちにも納得してもらえる提案を国と
連携して考えていきたい。

おもて

汚染水による食品などの
風評はどう解決するか？



一般の方の考えていることは技術的^①なことではなく、
むしろ『実生活的』なものではないか。
デブリ等よりも、それで汚染された水の方が『実生活
的』であろう。

うら

水産物などに持たれている「アブナイ」という
イメージをどのように払拭するか。

正確な状況が伝わっていないのでは？

1. マイナスの要素を消すのではなく、
プラスの要素を増やしていく。
2. 地元の人々が自信を持って福島の水産物を食べる。
3. 代替えがでない(生活に需要があるブランド化)
ものをつくる。

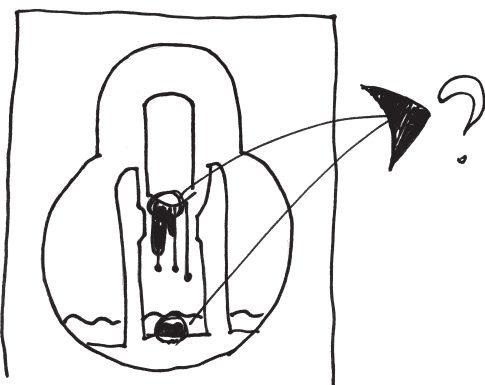
＜実例＞

- ・あんほ柿の生産者が、他県でフェアを行った
ことにより、それまで持たれていた悪いイメージ
がなくなり、良いイメージに変わった。
- ・いわき市の「トマトランド」に見られるように、
観光地化・ブランド化をしたことにより、
多くの人にトマトを食べてもらえるようになった。

風評の根本には、未だに汚染水が発生し続け
ている一方、一般の人々の原発問題への知識不足
もある。一刻も早い汚染水問題の解決と、
知識の周知が必要である。

おもて

デブリや汚染水のゆくえは？



・デブリや汚染水のゆくえは？

・廃棄物の受け入れは？

うら

デブリや汚染水の処理をどうするか？

どのように安全に処分するか？

② 2方面からのアプローチ

体系的	文系的
・ <u>性状把握</u> ・ 廃棄物の性質を正しく 理解し、 技術を駆使して処理 を行う (ex) 保管施設を作る	・ <u>平等な合意形成</u> ・ 各都道府県に受け入れ てもらい、負担を平等に ・ 国や県に協力を募り、 日本全体で共通の理解 を形成する

汚染廃棄物そのものについてよく理解し、
技術を用いて安全性を証明することが大切。

安全性を証明することが最終的な処理場所の決定
にもつながる

